源氏物語の植物　2019.08.02　×2021.02.05×➜2022.02.04

帖 (年齢)	帖名	植物	登場の場面	解　説
第1帖 ～ 第10帖		**2019.08.02**		
第11帖 (25歳)	花散里 ・故桐壺院の女御、麗景殿を訪れる ・タチバナの香り ・花散里は若楓のような女性	**カツラ ＝桂**	・「御耳とまりて、門ぢかなる所なれば、すこしさし出でて、見いれ給うへれば、大きなる桂の木の追い風に、祭りの頃おぼし出でられて、そこはかとなく、けはひをかしきを、…」 (18帖　松風) ・冷泉帝　　月の住む　川のをちなる里なれば　桂の影はのどけかるらむ	・カツラ科 ・Cercidiphyllum japonicum ・落葉高木、雌雄異株、秋の黄葉⇒マルトール ・葵祭りでは、この桂の小枝にフタバアオイをつけたもので、社殿の装飾、行列の斎王、神官などは頭に頭挿して供奉(ぐぶ)する。 ・麗景殿の女御(故桐壺院の女御、源氏の庇護を受けひっそりと暮らしていた)を訪れる途中に、源氏は中川(現　寺町本能寺)を通った。 ・その途中よい音のする琴の音が聞こえたので車を止めた。 ・ただ一度だけ来たことのある女の家。⇒大きなカツラの木があった。 ・左欄上側の、桂の葉の匂いは、マルトールの香りと推察、紫式部は香りを楽しんだ？ ・季節は「秋」ではなく、『梅雨の頃』の描写である。
		タチバナ ＝橘	・源氏　　橘の香をなつかしみほととぎす　花ちるさとをたづねてぞ訪(と)ふ (24帖「胡蝶」　箱の蓋に盛ってあるおん果物の中に橘のあるのをもてあそび給うて…)	・ミカン科 ・Citrus tachibana ・常緑、花は白・6月、果実は扁球状の奬果で黄色。 ・御所紫宸殿の前庭の「左近の桜、右近の橘」とあるように古い時代から観賞木とされた。 ・古歌には「はなたちばな＝花橘」と詠まれた。 ・当時食用とされていたが、現在は酸味が強すぎるため食用としない、がしかし、美味!! ・「明石の君」にたとえられた花。 ・光り輝く実(果実)。冬でも枯れない葉から、長寿と繁栄を祝福する植物。
第12帖 (26～27歳)	須磨 ・須磨へ都落ち ・突然暴風雨	**アシ・ヨシ ＝蘆・葦**	・「…茅屋(かやや)ども　葦(あし)ふける廊(ろう)めく屋(や)など　をかしうしつらへ…」 (5帖「若紫」) ・源氏　　幼(いはけな)き田鶴(たづ)の一声聞きしより　蘆間になづむ船ぞえならぬ	・イネ科 ・Phrabmites communis ・多年草。沼、沢、河辺に分布 ・地中に長い根茎⇒大群落 ・茎⇒屋根、垣、簾(すだれ) ・アシを本名とするが、縁起上ヨシ(良し、善し) ・朧月夜との密会が露見したことから、自ら須磨へ退去するがそこ(須磨)での住まいのわびれた様子を描写。
		シノブ ＝忍	・花散里　荒れまさる軒の葱(しのぶ)をながめつつ　しげくも露のかかるそでかな (4帖「夕顔」　見上げる門が荒れ果ててゐて　忍草が生い茂ってゐるのが　たとへやうもなをぐらいのです)	・シノブ科 ・Davallia mariesii ・シダ植物。シノブ科。細長い茎で岩上を匍匐する。 ・木炭などに植えて忍玉とし、軒先などに吊して観賞。 ・忍の名は、この草が土のない岩石上に多く生育し、いかにも堪え忍んでいるように見えることから。 ・時の経過、荒廃を象徴。朽ちた家屋に生える⇒ヨモギやムグラと同じ。

第13帖 (27～28歳)	明石 ・故桐壺院が夢枕「須磨を去れ！」 ・明石の君と結婚 ・都に帰る	**オニグルミ ＝鬼胡桃**	・却(かえ)ってかう云う辺鄙(へんぴ)な土地にこそ案外な人が埋(うづ)もれてゐないものでもないと　心づかひをなすって　高麗(こま)の<u>胡桃</u>色の紙に　特別に念をお入れなされて……	・クルミ科 ・Juglans mandshurica ssp. siebildiana ・河の流れに沿った山野に自生。種子は食用 ・明石は須磨とちがい人も多くにぎやか。 ・明石の入道の家は海辺や山際にいくつもあり見るからに裕福。 ・光源氏は海辺の家に住み、入道の一人娘⇒明石の君に手紙を出す。 この紙が、<u>胡桃</u>で染められていた。(樹皮、果皮。赤系の茶色。) ・明石の君は、気位が高くどうせ旅の一時のなぐさみにされ、捨てられるだけだと心を動かさない。 が、秋、入道の山の家で結婚。
第14帖 (28歳)	澪標 ・源氏に再び権勢がめぐる ・住吉明神に参詣 ・六条御息所は娘を源氏に託して死亡	**カジノキ ＝ゆう(木綿)＝梶・楮・穀・構・拷**	・源氏　　みをつくし恋ふるしるしにここまでも　廻り逢ひける縁(えに)は深しな ・明石の君　　数ならでなにはのこともかひなきに　　何みをつくし思ひ初めけん 田簑島(たみのじま)での祓いの<u>木綿(ゆう)</u>につけてこの返事は源氏のところへ来た……	・クワ科 ・Broussonetia kazinoki ・若い茎には剛毛、葉にも剛毛。 ・雌雄別株。花は5～6月、果実は初秋・オレンジ色、可食。 ・この葉の表に、古く貴族の間では、七夕祭りにこの葉(表)に和歌を書き、楽しんだ。 ・ゆう(木綿)は、このカジノキの樹皮を白くさらして麻のように割いたもの or その糸で織った布を言う。 ・澪標は「水脈(みお)つ串」で、船に水路を知らせた杭のことで、難波の名物だった。 ・源氏と明石の君との歌に見え、「身を尽くし」と掛ける。
第15帖 (28～29歳)	蓬生 ・末摘花邸が荒廃、再会。手厚く庇護、二条院に引取る	**ヨモギ ＝蓬**	・源氏　　尋ねても我こそ訪はぬみちなくも　ふかき<u>蓬</u>のもとのこころを (18帖「松風」　<u>蓬</u>や葎(むぐら)の生い茂った貧しい邸の……)	・キク科 ・Artemisia indica var. maximowiczii ・多年生草本。 ・特有の香り。 ・古くから邪気を払うもの。端午の節句には菖蒲とともにお風呂に。 ・若葉を用いてヨモギ餅。 ・お灸に使う<u>「熟艾(もぐさ)」はヨモギの葉の裏の毛を集めたもの</u>。 ・松風の巻きにもあるように手入れされていない庭の雑草、の様子。貧しい宿の形容。
第16帖 (29歳)	関屋 ・逢坂の関で空蝉に逢う ・空蝉は尼に ・後に、二条東院に引き取り、庇護	**紅葉**	・長月(９月)晦日(つごもり＝30日)なれば　<u>紅葉</u>の　色々こきまぜ　霜枯れの草むらむらをかしう見え渡るに　……	・空蝉は源氏の愛を拒んだ後、夫(伊予の介)が常陸の介になり常陸に下っていた。任期が終わり、 上京する途中、逢坂の関で、石山寺に願ほどきに参詣する途中であった。 ・その行列に出会い、再会。 ・９月30日、山の紅葉は濃く薄く紅を重ねた間に、霜枯れの草の黄色が混じって見渡される逢坂山 ・空蝉は尼となる。(言い寄る男から身を守る手段) ・空蝉も後に末摘花と同じく源氏の二条院に引き取られ、生涯源氏の庇護を受ける ・空蝉は源氏との契りは一度だけ、あとは、源氏の愛を受け付けなかったプライド高き女性で、 紫式部が自分自身をモデルにした女性、と言われている。
第17帖 (31歳)	絵合 ・須磨の絵日記は大きな感動	**ツゲ ＝黄楊木**	・当日(前斎宮(＝後の秋好むの中宮)の冷泉帝に入内の日)になって　朱雀院からのたいしたお贈り物が来た。御衣服、<u>櫛</u>の箱、乱れ箱、…… ・わかれ路(じ)に添えし小<u>櫛</u>をかごとにて　はるけき仲と神やいさめし (34帖「若菜上」　さしつぎに見る物にもが萬世(よろづよ)を　<u>黄楊</u>の小櫛の神さぶるまで)	・ツゲ科、対生葉序。 ・Buxus microphylla var. japonica ・材は黄色で堅い。櫛、ソロバン玉、将棋の駒。 ・イヌツゲはモチノキ科で互生葉序。 ・物語には、<u>思い出の詰まった黄楊の櫛などの場面に登場。</u> (朱雀院最愛の姫君・三の宮の御裳着の式に、秋好中宮から櫛の箱を贈られた朱雀院が、お返しになった句で、 中宮のように幸福になってほしいとの思いを込めて詠われた。)
第18帖 (31歳)	松風 ・二条院・嵯峨野御堂造営 ・明石の君は、大堰川のほとりにあった山荘に住み、源氏と再会	**マツ ＝松**	・明石の尼君　身をかへてひとり帰れる山里に　ききしに似たる<u>松</u>風ぞ吹く (29帖「行幸」の小塩山の松⇒アカマツ)	・マツ科 ・Pinus densiflora (アカマツ)　P. htunbergii (クロマツ)　P. parviflora (ゴヨウマツ) ・明石の尼君らが住んだ大堰川(桂川上流)の松も29帖に出てくる小塩山の松もアカマツ、と推察。 ・別名は女松(めまつ) ・二葉松

第19帖 (31～32歳)	薄雲 ・明石の君の姫君、二条院へ ・太政大臣(葵の上の父)、藤壺の相次ぐ死。 ・春秋優越論(梅壺、紫の上)	マツ =松	・母娘、生き別れの悲しい名場面 ・「末遠き二葉(ふたば)の松にひきわかれいつか木(こ)高きかげを見るべき」	がしかし、須磨や明石の海岸で源氏が見たマツは、クロマツと推察 ※クロマツとアカマツは生育環境により住み分けている クロマツ➡耐潮性あり アカマツ➡耐乾性あり➡山の尾根筋
		コウジ =柑子 =キシュウミカン =紀州蜜柑	・「このごろでは　柑子類すらもお口にお触れになりませんから　ご衰弱が進む……」 (31帖　「真木柱」　柑子や橘などのように見せかけて……」	・ミカン科 ・Citrus kinokuni ・花は白、花期は6月頃 ・コウジ(柑子)は、紀州蜜柑の古名前、古くから日本で栽培されていたが近年少ない。 ・温州ミカンはこれの栽培品種 ・太政大臣(源氏の正妻である葵の上の父)が亡くなり、源氏の父である桐壺帝の後妻さんである藤壺の容態も悪く、その様子を源氏がお付きの人に聞いている場面 ・この場面から、当時は、食用にしていたことがわかる。
		ヤナギ =柳 =枝垂柳	・「柳の枝に桜を咲かせたのはあの方。どんな前生(ぜんしょう)をお持ちになる……」	・ヤナギ科 ・Salix babylonica var. lavallei ・枝垂柳は古く中国から渡来。 ・平安時代のうららかな春の模様を描写する場面 ・光源氏が、秋好むの中宮と春秋優越論を行った後で源氏が立ち去る場面で、立ち去った後、源氏の衣服の香が敷物に移り香として残っており、中宮の女房たちのうわさ話の場面。 ・「やなぎ」はシダレヤナギか。 ・柳も桜も春の植物。柳に同時に桜の花を咲かせたという光源氏はそれほどスゴイ人、伝説の人 ・女三の宮は「如月の青柳」とたとえられる。
第20帖 (32歳)	朝顔 ・朝顔の君は、源氏の愛を拒み通した唯一の女性	アサガホ =朝顔	枯れたる花どもの中に　朝顔の　これかれに　はひまつはれて　あるかなきかに咲きて　匂ひもとくに変われるを　折らせ給ひて　たてまつれ給ふ ・源氏　　見し折りの露わすられぬ朝顔の　はなのさかりは過ぎやしぬらん ・朝顔　　秋はてて　霧のまがきにむすぼほれ　あるかなきかに　うつるあさがほ	・ヒルガオ科の一年草 ・Ipomoea nil ・熱帯アジ原産、奈良時代の末に中国から薬用(牽牛子)として渡来。 ・万葉集に出てくるアサガオはキキョウ。 ・平安時代のアサガオは牽牛子⇒今で言う、朝顔。 ・朝顔の君は賀茂神社に奉仕していたが父親(桃園の宮=式部卿宮=故桐壺院の弟)の死去後、自宅で、女五の宮(源氏の叔母)と住んでいた。 ・源氏は若い頃から、朝顔の君に気があり、女五の宮の病気見舞いにかこつけて、朝顔を訪問するが、冷たくあしらわれた。 ・翌朝源氏は、朝霧の立つ庭をボンヤリと眺める。 ・「以前見たときに差し上げた、露に輝く美しい朝顔が忘れられない。花の盛りを過ぎたとは言わないで、私に見せてください。」 ・「秋が終わって霧がかかった垣根にまとわりついて残っているあるかないかわからない姿で色が衰えている、その朝顔は私です。」 ・朝に咲き、夕にしぼむ花⇒はかない事象に ・「朝顔の姫君」は、源氏の愛を拒み通した唯一の女性。

		モモ **=桃**	長月になって　桃園の御所にお引き移りなされた由をお聞きになりますと、女五の宮がそちらにおいでになりますので　そのお見舞いにかこつけて　お渡りになります。	・中国原産。 ・バラ科 ・学名Prunus persica からわかるように、シルクロードを通ってペルシャ(現　イラン)にわたり、リンネが命名。 ・世界各地で栽培。⇒果実の食用、花の観賞。 ・朝顔の姫君は、故桐壺院の弟にあたる、父・桃園の式部卿の宮が亡くなったので喪に服するため賀茂の斎院を退き桃園邸に住んだ。 ・桃園の名前は、式部卿の宮邸に桃が植えてあったが、当時はまだ珍しく世人の目について名付けられたとの説がある。 ・伏見桃山城の桃も平安時代からの遺産。
第21帖 (33～35歳)	少女＝乙女 ・源氏は太政大臣に ・雲居の雁(内大臣(頭の中将))と夕霧(源氏と葵の上の子)は相思相愛 ・六条院を造営	**ウノハナ** **=卯の花** **=ウツギ** **=空木**	・北のひんがしは　涼しげなる泉ありて　夏の陰によれり。前近きに前栽、呉竹、下風涼しかるべく　小高き森のようなる木ども　木深くおもしろく　山里めきて　卯の花咲くべき垣根ことさらにし渡して……	・ユキノシタ科 ・Deutzia crenata ・茎はきわめて堅く、木釘。縄文時代の火熾(おこ)し。 ・ウツギは幹がマカロニ状⇒「空木」と書く。 ・卯杖(うづえ)は、このウツギで作る。邪気を払い長寿を祝う。 ・歌にある「うのはなにおうかきねに」の「におう」は、香りではなく、花がワー、と咲いている様をあらわす。 ・六条院の夏の町には、謙虚で心優しい「花散里」が住んだ。 ・夏の町の庭。花橘、撫子、そうび(ノイバラ)、くたに(リンドウ)、卯の花(ウツギ)の垣根 ・彼女は、すなおな性質で、源氏の言葉に絶対の服従をする。
		ハマオモト **=浜万年青** **=ハマユウ** **=浜木綿**	向ひて見るかひなからむもいとほしげなり　かくて年経たまひにけれど　殿のさやうなる御容姿、御心と見たまうて　浜木綿ばかりの隔てさし隠しつつ　何くれともなし紛らはしたまふめるも　むべなりけり	・ヒガンバナ科。 ・Crinum asiaticum var. japonicum ・暖地の海岸に自生、常緑の多年草。 ・葉は大形で細くオモトに似て何枚も重なる。浜に咲くから浜オモト。花は6裂する花被。夜芳香 ・花が、ゆう＝木綿(コウゾの樹皮の繊維で作った白い布)でできているように見えることから、浜木綿(ハマユウ)という。 ・葉が何重にも重なっているので「幾重なる」「百重なす心」の序詞となった。 ・夕霧(源氏と正妻・葵の上との子供)は、雲居の雁(内大臣(頭中将)の次女)と幼なじみ(祖母の大宮に二人とも育てられた)で相思相愛の仲。 ・が、内大臣(頭中将)は雲居の雁を東宮妃にしたいがために二人の仲を裂いた。 ・源氏は夕霧を「花散里」に預け、子供のいない彼女は心から大切に育てた。 ・夕霧は、養母(花散里)の顔を見て、よくないお顔である。こんな人を父(源氏)は妻としている。あまりに美しくない顔の妻は向かい合ったときに気の毒になってしまうであろう、こんなに夫婦生活が長く、花散里は源氏を幾重にも愛しているのに、夫婦の関係を持たない、という愛に気が付く。
		イワツツジ **=岩躑躅** **=サツキ** **=皐月**	みなみひんがしは　山高く　春の花木　数をつくして植ゑ　池のさま　ゆほびかにおもしろくすぐれて　御前ちかき前栽　五葉・紅梅・櫻・藤・山吹・岩躑躅などやうの春のもてあそびを　わざと植ゑて　…	・ツツジ科 ・Rhododendron indicum ・古文献に登場する、岩躑躅は京都保津川峡の岩の多い場所に自生するサツキ。 ・紫の上は春を愛し、源氏と共に東南の春の町に住んだ。 ・春の町、山を高く築いて、あらゆる種類の春の花木を集めて植栽した。
		ヒカゲノカヅラ	かけていへば　今日のこととぞ思ほゆる　ひかげの霜のそでにとけしも	・ヒカゲノカヅラ科 ・Lycopodium clavatum ・山麓に生える多年生常緑草本➡長く伸びる➡繁栄の象徴と見なしたのか ・新嘗祭(にいなめさい)の翌日の節会(せちえ)を豊明宴(とよのあかりのうたげ)と称し、美しい4人の舞姫による「五節(ごせち)の舞」がある。舞姫や上達部(かんだちめ)、殿上人(でんじょうびと)までが、ヒカゲノカヅラをかざして、参加した。➡今でいう、ハチマキか。

第22帖 (35歳)	玉鬘 ・玉鬘は夕顔の忘れ形見 ・玉鬘十帖のはじまり ・源氏は娘として、六条院へ迎える ・女性たちに正月の晴れ着を贈る	**ミクリ =三稜 =実栗**	・源氏　　知らずとも尋ねて知らん三島江に　生(お)ふる**三稜(みくり)**のすぢはたえじを ・玉鬘　　数ならぬ**みくり**や何のすぢなれば　うきにしもかく根をとどめけん	・ミクリ科 ・Sparganium erectum ・池沼に分布する多年草、根は泥中を這い、次々に繁殖する。 ・花は単性、雌花の花序は雄花の下部にある。白い花は美しく優雅。 ・ミクリは実栗で、果実がイガイガの栗のようだから。 と、茎の下部が三つの稜になっていることから⇒三稜⇒ミクリ ・茎は水面上に出て、一名ヤガラ(矢柄)と呼ばれるように、三つの稜があり、 矢の柄になったと言われている。 ・今はご存じなくとも、大阪は摂津の三島の湿地に生えているミクリの草のように あなたと私が表面には見えなくても、同じツル(縁)によってつながっていることを、 誰かにお尋ねになるとおわかりになるでしょう。・ものの数にも入らぬミクリ草のようなつまらない身の私は、どういう因縁でこの浮き世に生を受けたのでしょう
		サネカズラ =ビナンカズラ(美男蔓)	この植物を特定できる表現はないが、玉鬘は全くこの植物の果実の姿にふさわしい、と思う	・マツブサ科 ・Kadsura japonica ・茎を水につけて放置すると、粘液⇒整髪料に ・大垂髪(おすべらかし) ・雄花、雌花、目立たず咲くが、美しい!
第23帖 (36歳)	**初音** **・年賀に六条院の女性を訪問** **・二条院に住む末摘花や空蝉も**	ワタ =綿	挿頭(かざし)の**綿**の造花(つくりばな)が色つやのないものですけれども　ところがらのせゐか風流に見えて……人々は例の被(かづけ)ものの**綿**を戴いて退出します (第41帖「幻」　**綿**で覆うてある菊を……) (第45帖「橋姫」　絹や**綿**を数多くお贈りになるのでした)	・アオイ科 ・Gossypium arboreum ➡この植物由来の綿ではないっ! ・紀元前2,500年前のモヘンジョダロ遺跡から綿の織物が発見されている。 ・キク(菊)は奈良時代、薬用として日本に渡来。 ・9月9日の重陽の日に、清涼殿前に一対の菊花壇⇒優劣⇒「菊合わせ」 ・前夜の9月8日に、菊の花に真綿(動物由来)をかぶせて、翌朝(重陽の日)に露に菊の香りが移った真綿を集めて、顔や身をぬぐい長寿・延命を願った。 ・①着せ綿　②冠に挿す綿の造花　③衣類や布団に ・源氏物語に登場する「ワタ」は「真綿」。蚕の繭からつくる。 ・8世紀後半、大陸から伝来した植物由来の綿は長続きせず、栽培の普及は戦国時代、と言われている ・なので、紫式部は木綿は見ていない、はず。
第24帖	**胡蝶** **・鳥の衣裳、銀の花瓶に桜の枝** **・蝶の衣裳、金の**	コケ =苔 =スギゴケ	ひとしほ濃くなった**苔**の緑などを…… (第５帖「若紫」　枕ゆふ今宵ばかりの露けさを深山の**苔**にくらべざらなん) (第44帖「竹河」　**苔**を筵に越しをおろして……」	・スギゴケ科 ・Polytrichum juniperinum ・筵(むしろ)の代わりに腰を下ろすコケはスギゴケ。

第24帖 (36歳)	表、金の花瓶に山吹をさして ・源氏は玉鬘に強い恋心、玉鬘は困惑	ヤマザクラ =山桜	池の水に影を映したる山吹　岸よりこぼれて　いみじき盛りなり… 鳥蝶に裳束(そうぞ)きわけたる童(わらは)べ八人かたちなど殊(こと)に調(ととの)へさせ給ひて 鳥には　銀の花瓶(はながめ)に櫻をさし　蝶には金の瓶に　山吹を	・バラ科 ・Prunus jamasakura ・王朝人が愛した山桜の花色はほのかなピンク、これが桜色で、女性のみならず男性などにも愛好された色。 ・紫の上を象徴する花。
第25帖 (36歳)	蛍 ・蛍の光に映し出される玉鬘の横顔 ・蛍の宮は玉鬘の美しさに魅せられる	ショウブ =菖蒲	・螢兵部卿の宮　　けふさへや引く人もなきみがくれに　生ふる菖蒲(あやめ)のねの みなかれん ・玉鬘　　あらはれていとど浅くも見ゆるかな　菖蒲もわかずなかれけるねの	・サトイモ科 ・Acorus calamus ・古文でアヤメと称するのは現在のサトイモ科のショウブで肉穂花序。 ・香気があり、端午の節句の頃、菖蒲湯。 ・源氏物語では、五月の節句にちなみ、かつ、不遇の人に比されて登場。 ・ショウブの花は水辺に生え、地味で不遇な植物と考えられた。 ・端午の節句の今日でさえ、引き抜く人もないアヤメの根は水の中に隠れています。 あなたに相手にしていただけない私は、人目に隠れて泣いています。 ・普段水の中に隠れているアヤメの根が水面に現れて一層浅く見えます。あなたの気持ちは思ったより浅いのですね。
		アフチ =オウチ =センダン =栴檀	菖蒲かさねのあこめ　二藍のうすもののかざみ着たる童(わらは)べぞ　西の対なめる。 好ましく馴れたるかぎり四人　下仕えは　あふちのすそごの裳(も)　撫子の若葉の色 したる唐衣(からぎぬ)…	・センダン科 ・Melia azedarach ・花は5～6月、淡紫色⇒結構いい香り。 ・「栴檀は双葉より芳し」の栴檀はビャクダン科のビャクダンのこと。で、この植物ではない。 ・センダンの古名は「アフチ(オウチ)」 ・果実は数珠玉に。 ・六条院の花散里が住む夏の町には馬場があり、五月五日の端午の節句には馬場で騎射が行われる。それを見学する女童の美しい服装。 ・源氏物語では、襲(かさね)の色目として登場。
		アイ =藍	菖蒲かさねのあこめ　二藍のうすもののかざみ着たる童(わらは)べぞ　西の対なめる。 好ましく馴れたるかぎり四人　下仕えは　あふちのすそごの裳(も)　撫子の若葉の色 したる唐衣(からぎぬ)…	・タデ科 ・Polygonum tinctorium ・タデアイ(蓼藍)は古くビルマ(現ミャンマー)から中国を経て古い時代に渡来。 ・染料植物としての藍染めは、染めの代表。 ・この時代、貴族から庶民まで衣料の色として広く使用。 ・藍色は源氏物語には欠かせない色。 ・京都でも上鳥羽でも大正時代には多くの蓼藍を栽培していた。 ・女童の着ている「二藍(ふたあい)」は「経は紅、緯は藍」の織物。紅色と藍色との二種が混じった青みを帯びた紫色。 ・菖蒲襲(しょうぶがさね)⇒表が青、裏が紅梅など、いろいろの説がある。 ・袒(あこめ)⇒童女の表着 ・汗衫(かざみ)⇒童女の表着。袒の上に着る。